

(フォーラム趣旨) 経済思想におけるインターカルチュラルな視座

このフォーラムは、今回のゲストである前欧州経済学史学会会長ベルトラン・シェフォールト教授がその編集する経済学古典復刻叢書 (Klassiker der Nationalökonomie, Verlag Wirtschaft und Finanzen, Düsseldorf) において、三浦梅園『価原』と桓寛『塩鉄論』という東アジアの古典2点を加えて刊行されたことをきっかけとしている。『価原』の場合には手沢本、『塩鉄論』の場合は漢文の版本のまま複製したものに、ドイツ語の翻訳とともに、シェフォールト教授自身を含む数人の研究者による解説論文を収録したコメンタールを付している。

ここで意義深いことは経済学・経済思想の古典的カノンの列に、非西洋の文献が加わったことである。この古典復刻叢書には、通常の経済思想史では扱われないギリシア古典や、西洋中世の文献も含まれている。14世紀のイスラム世界に生きたイブン・ハルドゥーンの『歴史序説』が収録されていることも関心をそそる。しかし、それらは近代西洋の古典ではないにせよ、西洋世界の基礎にあるギリシア・ユダヤ的な伝統を共有している文化世界の古典である。この点で、『価原』『塩鉄論』とは異なっている。

東アジアの伝統に属する古典が加わることによって生まれる視野の広がりを、「インターカルチュラルな視座」とよぼう。インターカルチュラルな視座というのは、西洋なら西洋、あるいは東アジアなら東アジアの文化を相対化する見方ではあるが、文化にかかわらずの普遍性の探求ということではない。文化的特殊性にとらわれたローカルな視点と、経済的合理性のユニバーサルな視点の双方の限界を自覚することである。内発的な過程としては、異なる文化的伝統のもとでも類似した思想が生まれることがあり、また外発的な過程としては、異なる文化的伝統のもとでも思想の伝播が起こることがある。結果としての、思想の社会的機能は当然に異なり、多様な変異が生みだされることになるが、比較が不可能なわけではない。

「文化」は、人間集団の多層・多面にわたる生活過程のなかで形成・再生産される信念 (belief) の集合といつてよいであろうが、Deepak Lal (Unintended Consequences, 1999) の区分を借りれば、生活の維持に直接必要となる「物質的な信念 material belief」と自己および世界の解釈にかかわる「非物質的ないし宇宙論的な信念 immaterial or cosmological belief」からなっている。Lal は、資源の賦存状況に規定された経済および社会の編成のあり方と「非物質的信念」の双方に規定されたものとして人々の行動を考えているが、これはマックス・ヴェーバーの「宗教社会学」の見方に近い。

「経済」については、希少資源の合理的配分という個人主義的かつ「形式主義」的な見方と、社会制度および文化的意味と結びついた社会的な欲望充足活動という「実質主義」の見方が存在する。非市場的な社会における経済の理解においては、「実質主義」的な見方の妥当性が増すであろう。社会は、多数の人々の成功・不成功を伴いつつ事後的な学習をかさねて進化的に変化する。そのなかで人々の心性と社会制度が均衡するならば安定した状態がもたらされるが、それは絶対的な安定ではない。とくに他の社会との相互交渉がおり、他の文化要素の浸透が起こるならば、変異が多数発生することになるだろう。

現在おこっている事態は、全世界における距離的懸隔の消失という「グローバリゼーション」であり、そのもとで文化の変容が急速に起きている。「グローバリゼーション」は、社会の閉鎖性を打破し人々に自由の可能性を与えるが、他方でローカルな文化を破壊し、選択自体を劣化させる。法制と制度実態、法的規制と倫理・道徳のあいだにはつねに隔てがあるから、国際的な法規の調整だけでは、経済活動の基礎になる信頼を生みだすことはできない。したがって「グローバリゼーション」と同時に、思想の「土着化 Vernacularization」が生まれなければ、選択は豊かにならない。

グローバリゼーションのもとで、欧米のみならず、アジア諸国とも距離が消失する時代に入るなかでは、インターカルチュラルな視座はこれまで以上に入組んだものにならざるをえないであろう。このフォーラムでは、西洋の文化世界に東アジア古典を導入したシェフォールト教授の提言を受けて、東アジアにおける経済思想の意味とそれをとらえるべき「インターカルチュラルな視座」について討論することとしたい。

(文責 八木紀一郎)